

## 電話の向こうはどんな顔

ルルルルル ルルルルル

電話のベルがなりました。陽一くんは、読みかけのまんがの本を  
持ったまま、受話きを取りました。

「はい、山田です。どなたですか。」

「あら、陽ちゃん。岩井です。お母さんいらっしゃる。」

お母さんの友だちの岩井さんからの電話です。

「はい、少しお待ちください。」

陽一くんは、右手にまんがの本、左手に受話きを持ったまま、台  
所にいるはずのお母さんをよびました。

「お母さん、岩井さんから電話。」

そう言って、受話きをそばにある台の上におこうとしました。

でも、台の上は、電話帳だのメモ帳だのいっぱい입니다。しかた  
がないので、受話きをかたにかけ、まんがを読みながらお母さんを

待つことにしました。なんとといっても、今  
日買ったばかりの本です。陽一くんの頭  
中にはそれしかないのです。

しばらくして、はっとしました。お母さ  
んがまだ来ていないのです。陽一くんは、  
あわててもう一度、さっきよりずっと大き  
な声でよびました。

「お母さん、でん・わ。」

「はい。」

今度は、すぐに返事がありました。

でも、なんだかずいぶん遠くの方から聞

こえてくるようです。大じょうぶかなと思って、受話きをメモ帳の  
上におき、急いで台所へ行ってみると、ベランダのドアが開いてい  
ます。どうやら、お母さんはベランダで仕事をしていたようです。

「はいはい、ありがとうございます。どなたから。」

「岩井さんからだよ。」



お母さんは、手をふきながらようやくペランダから出て来ました。さいしょにお母さんをよんだ声は聞こえなかったようです。陽一くんは、ほっとしてまたまんがを読み始めました。

「あら、どうしたのかしら。こんなところに受話きか。」  
電話のそばまで来たお母さんは、びっくりしたように言いました。受話きが、ゆかに落ちていたのです。

お母さんよりもっとびっくりしたのは、陽一くんのほうでした。そのときのようすが想ぞうできたからです。

お母さんは、あわてて受話きを手にすると、すぐに話し始めました。

「もしもし、お待ちしてすみません。」

「……………」

「えっ、そうなの。それは大へんしつ礼しました。」

「……………」

陽一くんは、またまんがを読み始めました。でも、岩井さんとお母さんの話が、気になってしかたがありません。

電話で話し終わった

お母さんの顔は、思ったとおり、いつもと少しちがっていました。

「陽ちゃん、岩井さんは、受話きの向こうでどんな顔をなさっていたんでしょね。」



お母さんの言いたいことは、陽一くんにもよくわかりました。そして、そのとき、やっと陽一くんの中からまんがのことが消えたのです。